

日本宇宙フォーラムの謎

寺菌淳也

さて、I田編集長からこんなお題をいただいて、何を書こうか、結構思案してしまった。何しろ、まず普通の自己紹介では面白くないだろうし、でもいきなりディープな話を書いてしまうと、業界インサイダー誌みたいになっちゃうし…。

そんなわけで、謎というからにはやはりお得意のFAQ方式が適当であろう。以下は、私の経験からよく聞かれる、日本宇宙フォーラム(JSF)の「謎」に対するお答えである。

ではさっそく、謎解きに入るとしよう。

日本宇宙フォーラムって、何？

財団法人です、…ていっても答えになってないよなあ。

JSFの設立は1994年2月である。まだできて6年半の、比較的新しい財団法人である。

話は、その一昨年前(1992年)の国際宇宙年(ISY)にさかのぼる。この年、毛利衛宇宙飛行士がスペースシャトルで初飛行を行い、日本でも宇宙への関心が大いに高まった[1]。ISYでの実績を踏まえ、これからの宇宙開発に向けて、広報と技術開発を推進していくために、ISYの日本事務局が母体になってできたのが、今のJSFである。

したがって、JSFの役割は、宇宙開発に関する科学技術に関する調査研究、国際会議やシンポジウムの開催やその助成、宇宙開発の普及啓発や人材交流の促進、ということになっている。

ところで、JSFは「財団法人」である。宇宙開発事業

団(NASDA)は国から100%の出資を受けた「特殊法人」であるが、この財団法人は、日本の宇宙関係の企業40社の共同出資で成り立っている財団である。その意味ではJSFは完全な民間法人であるが、仕事での結びつきは圧倒的にNASDAとの関係が強い。

JSFってどんなことをしてるの？

JSFは、日本の宇宙開発の発展を目指して、研究を支援したり、広報活動を行うことを使命としている…といってもわかりにくいと思うので、多少噛み砕いて説明することにしたい。

上で述べたJSFの仕事を、4つに大きく分けて整理しよう。

(1) 調査研究の支援

惑星科学にもっとも近い話としては、宇宙研と宇宙開発事業団(NASDA)で共同で進めている、SELENE計画の支援が挙げられる。JSFでは、SELENEプロジェクトの事務局として、事務所の運営や旅費などの金銭面の管理・支出などといった事務作業を行っている。もちろん、実際の研究会の支援などにも積極的に関わっている。

また、最近では、岡山県・美星町に、日本ではじめての宇宙デブリ・地球近傍小惑星観測用の望遠鏡施設の建設も行っている。この施設は「美星スペースガードセンター」と名付けられた。平成12年度に入ってテスト観測も行われはじめ、本格的な観測に向けた

準備が着実に進められている(図1)。また、平成15年度には、岡山・上斎原村に同じく、レーダを利用した観測施設が完成する予定である。

ここ1年ほどのトピックとしては、宇宙インフラストラクチャー研究会がある。これは、将来的な宇宙開発のビジョンを策定するために、日本の宇宙4機関を中心とした研究者・技術者など300名が集まって議論する場である。JSFはここでも事務局として、積極的に関わっている。

また、ベンチャー企業が持っている技術を、将来の宇宙開発に活かしていくことを目的とした「宇宙開発ベンチャー・ハイテク開発制度」の事務局もJSFにある。

JSFではまた、宇宙関係の調査業務も行っている。たとえば、海外の宇宙関係の新聞や雑誌の記事を集めてそれを翻訳したり、データベース化する仕事なども行っている。また、国内や海外の宇宙開発についての情報をまとめた、宇宙開発データブックの発行も行っている。

(2) 国際会議の支援

JSFでは、NASAが開催する宇宙関係の国際会議の支援を行っている。また、国際宇宙大学(ISU)夏期セッションへの学生派遣や、IAFへの学生派遣プログラムの事務局なども、JSFが行っている。

会議の運営は、会場や来賓の切符・ホテルの手配からスケジュール作成、調整作業などの細かな仕事がある山のようなのだが、これは長年(といってもできて6年だが)のノウハウをもとにして、きめ細かなサポートを行っている。

(3) 公募地上研究

宇宙ステーションに関連した公募地上研究の事務局はJSFである。この研究を通じて、「JSF」という名前を聞いたことがあるという人も多いかもしれない。

地上研究公募研究制度は、将来の宇宙ステーションにおける科学研究を推進する目的で始められた。

今年度は合計で81件のテーマが選定されて、研究が進められていく予定である。

(4) 広報活動

宇宙関係のイベントでJSFという名前を見かけることも多いのではないだろうか。たとえば毎年、宇宙の日の前後に開かれる「宇宙ふれあい塾」では、JSFが企画・運営を行っている。その他、学生が人工衛星の設計技術を競う衛星設計コンテストや、いろいろな展示会(最近では、「21世紀 夢の技術展」などもそうである)の展示なども、JSFで行っているものもある。

あと、意外に思われるかもしれないが、NASAホームページ[2]も、実はJSFが主体となって作っている。ホームページの作成や企画、運用もJSFの大切な仕事である。

また、NASAのロケットや人工衛星の写真の配布や管理もJSFで行っている。たとえば、何かのパンフレットで、H-IIロケットの写真を使いたいとしよう。その場合には写真が必要になるが、この写真を入手する窓口はJSFである。

「支援」っていうけど、どんなこと?

上の文章でもさんざん「支援」という言葉を使っているが、この「支援」の中身というのは、一体なんなのだろうか?

たとえば、なにかの研究会を開催したとする。そうすれば、旅費が発生したり、調査すべき仕事などが出てきたりする。こんなときに、旅費の支払いの事務手続きを行ったり、実際の調査を行ったりするのが支援である。いわば、研究に関する実務部隊といってもよいと思う。

また、研究会や委員会では議事録をとるのが普通である。また、会議資料をまとめたり、欠席した人に送ることもある。研究会が終了したら、成果報告書も作らなければならない。このような、研究活動を維持

していくための仕事も、支援の大事な仕事である。

もちろん、議事録を取ったり成果報告書をまとめるためには、その分野に関する知識が必要である。JSFでは月探査に限らず、いろいろな分野の研究会・委員会を開催しているので、より広い分野にわたる科学的、技術的な知識が必要になる。

JSFでの「支援」活動では、技術的・科学的な能力もさることながら、事務手続きや交渉能力、ときには地理や学校名などのさまざまな知識にも精通している必要がある。その意味ではなかなか大変な仕事ではあるが、逆に、研究活動の全体が見える位置にいないえなくもない。

私自身はこういった事務局業務に加えて、技術支援も行っている。たとえば、「インターネットシンポジウム ふたたび月へ」[3]のホームページ作成やその管理、美星スペースガードセンターのネットワーク構築などである。こういった仕事も、専門的な領域を必要とされる。

支援を行う事務局は、専門性に加えて、一般的な知識とフットワーク、それに素早く仕事を行う能力が要求される。その意味ではかなり大変な仕事ではあるが、その分やりがいも大きい。

JSFにいると、宇宙開発の最前線で何が起きているかを、身をもって体験することもできるはずである。

職場はどんなところなの？

JSFは、浜松町のセントラルビルというところに本社を構えている。浜松町は、東京のオフィス街の真っ只中にある。このセントラルビルは、NASDA本社がある世界貿易センタービルの斜め向かいにあって、それ自体、NASDAとの結びつきが強いことの証しともいえるだろう。

このビルの8階がオフィスである。見た感じは、普通の会社のオフィスと大きく変わるところはない。ま、あまり研究活動をするという感じではないが、広いオ

フィスで快適な仕事ができるという点では、都心という環境は恵まれているともいえるだろう。

実は、このオフィスに引っ越してきたのは3年前である。それまでは近くの雑居ビルに事務所を構えていた。人も増えてきて手狭になってきたことから、現在のビルに移ってきたのである。設立当時は、わずか2人で事務所を構えていたJSFであるが、現在はこのオフィスで70人以上が働いている。私は平成7年入社であるが、もう実は古参クラスになってしまっている。

また、浜松町はオフィス街でもあり、アフター5の環境にも恵まれている。特に、JSFの斜め向かいには有名な立ち飲み屋「秋田屋」があり、夕方になると、大門交差点一帯は焼き鳥の香り(煙?)に包まれる。ベイエリアも近く、歩いて10分も行けば竹芝の棧橋から、海を眺めることもできる。

私自身は、浜松町だけでなく、よく筑波宇宙センターに行って仕事をしている。特に、技術の関係者はNASDA関係の技術支援が多いため、「何かあるとすぐつくば」ということも珍しくない。そのため、私とつくばで会って、「テラキン、NASDAにいたんだっけ?」という人も珍しくない。

また、会議の手伝いなども行うことがある。会議の会場で関係者の方にはよくお会いするのであるが、その時には情報収集で行っている場合と、受付や会場整理などのための労働者として行っている場合の2つがある。後者の場合には、受付にずーっと立っていたり、マイク係で会場を走り回っていたりすることが多いかもしれない。もちろん、私の場合はマイク係でありながら、その持っているマイクで自分で質問をしまったりするのであるが…。

JSFは女性が多いって本当？

JSFの特徴の1つは、職場に女性が多いことだろう。もちろん、事務職の女性だけではなく、研究や技術支援などの専門知識を持つ女性もいっぱい働いている。

私の隣では、東大・地質出身の山田真保さんが、月探査の支援のために専門知識も活かして縦横無尽の活躍をみせている。その他、英語の技能やバイオ関係の専門知識をフル活用して仕事を進めている女性もいる。

日本ではまだまだ、男女雇用差別が暗黙の形で存在している職場も多いようである。そんな中であって、JSFにおいては男女はまさに差別なく働いている。女性だからといって、仕事の内容に差をつけられたりすることはない。

その意味では、宇宙が好きな女性にとっては、魅力的な職場ともいえるだろう。

ふだんの仕事の雰囲気ってどんな感じなの？

さて、もう少し私のふだんの仕事の実態について触れてみることにしよう。

ずっと述べてきたように、JSFではいろいろな仕事がある。私自身は月探査と美星スペースガードセンター関連の仕事が主であるが、それだけではなく、全般にわたって動くことが必要になっている。

たとえば、調査関係で月・惑星探査機の最新情報があれば、その情報リソースを教えてあげたりすることもある（どちらかという、逆に教えてもらうことの方が多いかもしれないが）。また、訳語や、科学技術の専門用語を、一緒になって調べたりすることもある。

普及啓発部隊からは、月に関しての質問が来たりすることも多いので、それに対応したり、ときにはNASDAホームページにやってきた質問の答えを書いていることもある。

岡山に行けばネットワーク構築ということになるが、これも決して書類上の作業というわけではない。床下に潜ってネットワークの配線作業をすることもあるし、どちらかという「泥臭い」作業が多いことは間違いない。

そんなこんなで、毎日いろいろな話題が飛び込ん

できて、さまざまな情報を処理して生きていかなければいけないので、大変ではあるが刺激的ではある。

研究室の落ち着いた雰囲気、じっくりと研究活動、という状況からはかなり違ってしまっているが、こういうカオス的（はおおげさか）な雰囲気というの、またそれなりに刺激的で面白いともいえるだろう。

いざ、宇宙開発の真っ只中へ

日本の宇宙開発は今や、大きな転換点に立っている。省庁再編や組織改革の大波が押し寄せる一方で、技術的な面でも、低コスト化や情報化など、これまでの宇宙開発分野だけでは成り立ち得ない課題が続出している。

惑星探査、あるいは宇宙科学そのものも、宇宙開発と切り離して考えることはできない時代である。

さらにいえば、惑星探査や宇宙科学は、社会の理解があって初めて成り立つプロジェクトである。一般の人が惑星探査の意義を理解して、初めて惑星探査に予算が認められるのである。したがって、少なくともこれからの宇宙開発・宇宙研究は、一般の人々への広報活動と一体になって考えていく必要があるのではないだろうか。

アカデミックでもなく、研究所でもなく、プロジェクト遂行機関でもない。でも普通の会社とも違う。研究と広報をメインとする財団法人という立場は、いろいろな意味で面白いし、これからの可能性も広いはずである。

「フォーラム」という名前は、もともとは広場という意味である。宇宙開発や宇宙科学に携わる人たちと、一般の人たちが、広く交流し、意見を交換するための場として、JSFという環境は大変にふさわしいのではないだろうか。

[1]国際宇宙年は、世界中が協力して宇宙のことを考え、また地球環境について考える年として決めら

れた。この年の9月12日が毛利衛宇宙飛行士のシャトル初飛行で、以後この日を「宇宙の日」としている。

[2] <http://www.nasda.go.jp/>

[3] <http://moon.nasda.go.jp/>

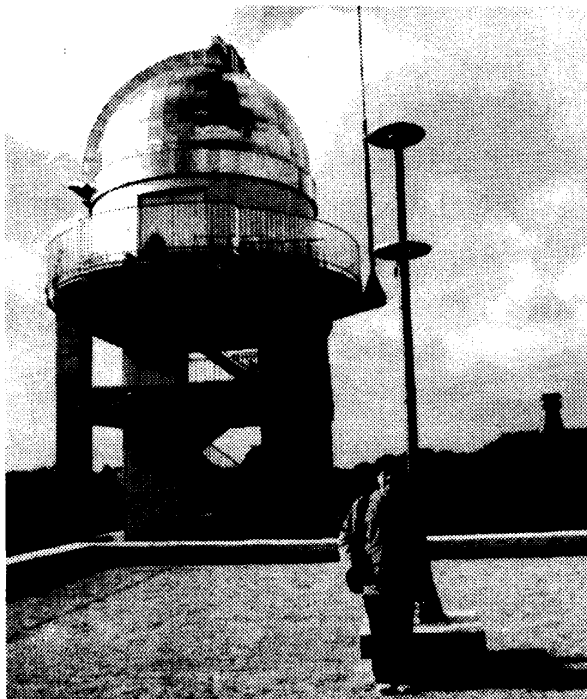


図1 美星スペースガードセンターの1m望遠鏡ドームと筆者。